

KYOTO MUSIC FESTIVAL kmf 2006

featuring
KYOTO JAZZ MASSIVE
MONDO GROSSO
FANTASTIC PLASTIC MACHINE

Watching Carefully

取材・文／竹中 聡(本誌) 撮影／畑中勝久

@METRO / etw
[世界] WORLD
LAB.TRIBE

COLLAGE
Ace cafe
Ace cafe red



K クラブカルチャーが酔っぱらいと暮れん坊だけじゃダメだ、と「kmf RE:DI0」で笑いを交えて語っていたMETROをホーム会場にした沖野修也・沖野好洋兄弟、看板の3アーティストの中で、最も「街の匂い」がするのが彼らだったかもしれない

M 「今日は僕の誕生日のために集まってくれて、ありがとうございます」と、ウェルカムパーティーで冗談を飛ばしていた大沢伸一。慎重な言葉を使う人だからこそ「地元が活性化すればね」というイベント前に寄せたコメントが胸に響く

F 「ホンマに素やなあ(笑)」とリラックスした様子だった田中知之。それは慣れからくるものでもあったろうが、力強い友が加わった安堵感がそう言わせたとでも思えた。今年も「kmf2006」のうち「F」に名前を貸した。肩にかかる重さが1/3になったのか、イベントが3倍の規模になったのか...

街の底から、遅く生まれ出たこの祭に祈ればいい。 「Kyoto Jack」セカンド・インパクト。

「今年と呼んでもらう立場なので、気楽です(笑)」。冗談とも本気ともつかないことを言ったのは田中知之だった。昨年、自身のデビュー10周年を祝う「FEM10」では、ホストとして彼の双肩にイベントの出来がかった。今年「kmf2006」のうち「F」に名前を貸した。肩にかかる重さが1/3になったのか、イベントが3倍の規模になったのか...

昨年の「RE:DI0」をリポートした本誌のテキストに、「伝説は一夜では成らない」という一節があった。「あの言葉で発憤した。そう語ったのは昨年・今年とイベントのオーガナイズを務めたSWILL Producersだ。予定調和を嫌い、常にサブプライズがあることが命題となり、今年もごく早いうちから計画が練られ、イベント当日に先がけて3カ月も前からαステーションでイベント専用プログラム「kmf RE:DI0」まで用意した。そして、昨年以上のイベントがやってきた。

「京都に新しい祭を」。そんな言葉がいくつも起こり、そして静かに消えていった。だが街から起こった催事は、雑草のように強い。しばらくの時を経て思う。「KYOTO JAZZ MASSIVE・沖野修也&沖野好洋」「MONDO GROSSO・大沢伸一」「FANTASTIC PLASTIC MACHINE・田中知之」という、京都の街の底から生まれ、そして日本のミュージックシーンを代表する大樹となった面々に冠したイベントは、祭であった。ビジネスだけでなく、感情論だけでもない。バランスの取れた京都の新しい催事になったことは間違いない。昨年同様、「Revenge」で行われたウェルカム・パーティー兼壮行会では、並み居る出演者たちがもはや手慣れた様子で各々の準備に向かった。オーディエンスたちも、要領が解らず右往左往した感はなく、スムーズに会場を行き来した。

恐らく来年もまた、このイベントは企画されるだろう。「2007」につなげるための「2006」だ。その時には、忌み嫌う「予定調和」という壁が待っているかもしれない。「ああ、去年のアレね」という言葉を覆すためには、常に成功を続けなければいけない。規模の拡大は、成功とイコールではないし、クラブ一カ所ですべて終わるものであってはいけないだろうが、年を重ねてベストなサイズになっていけばいい。言葉を変えて「定例」と捉えればいい。誰もが心待ちにする予定調和でありさえすればいいのだ。そして当日、待ちに待ったイベントの蓋を開けたとき、驚きに満ちたものがあるはずだ。

「街の底」から、ついに祭は生まれた。そして我々は祈ればいい。このイベントが歴史に刻まれ、何十年後に「伝説」として語り継がれるように。常に京都の秋が心躍るものになる。そのための充分なポテンシャルを持っているイベントなのだから。

「今年と呼んでもらう立場なので、気楽です(笑)」。冗談とも本気ともつかないことを言ったのは田中知之だった。昨年、自身のデビュー10周年を祝う「FEM10」では、ホストとして彼の双肩にイベントの出来がかった。今年「kmf2006」のうち「F」に名前を貸した。肩にかかる重さが1/3になったのか、イベントが3倍の規模になったのか...

昨年の「RE:DI0」をリポートした本誌のテキストに、「伝説は一夜では成らない」という一節があった。「あの言葉で発憤した。そう語ったのは昨年・今年とイベントのオーガナイズを務めたSWILL Producersだ。予定調和を嫌い、常にサブプライズがあることが命題となり、今年もごく早いうちから計画が練られ、イベント当日に先がけて3カ月も前からαステーションでイベント専用プログラム「kmf RE:DI0」まで用意した。そして、昨年以上のイベントがやってきた。

「京都に新しい祭を」。そんな言葉がいくつも起こり、そして静かに消えていった。だが街から起こった催事は、雑草のように強い。しばらくの時を経て思う。「KYOTO JAZZ MASSIVE・沖野修也&沖野好洋」「MONDO GROSSO・大沢伸一」「FANTASTIC PLASTIC MACHINE・田中知之」という、京都の街の底から生まれ、そして日本のミュージックシーンを代表する大樹となった面々に冠したイベントは、祭であった。ビジネスだけでなく、感情論だけでもない。バランスの取れた京都の新しい催事になったことは間違いない。昨年同様、「Revenge」で行われたウェルカム・パーティー兼壮行会では、並み居る出演者たちがもはや手慣れた様子で各々の準備に向かった。オーディエンスたちも、要領が解らず右往左往した感はなく、スムーズに会場を行き来した。

恐らく来年もまた、このイベントは企画されるだろう。「2007」につなげるための「2006」だ。その時には、忌み嫌う「予定調和」という壁が待っているかもしれない。「ああ、去年のアレね」という言葉を覆すためには、常に成功を続けなければいけない。規模の拡大は、成功とイコールではないし、クラブ一カ所ですべて終わるものであってはいけないだろうが、年を重ねてベストなサイズになっていけばいい。言葉を変えて「定例」と捉えればいい。誰もが心待ちにする予定調和でありさえすればいいのだ。そして当日、待ちに待ったイベントの蓋を開けたとき、驚きに満ちたものがあるはずだ。

「街の底」から、ついに祭は生まれた。そして我々は祈ればいい。このイベントが歴史に刻まれ、何十年後に「伝説」として語り継がれるように。常に京都の秋が心躍るものになる。そのための充分なポテンシャルを持っているイベントなのだから。

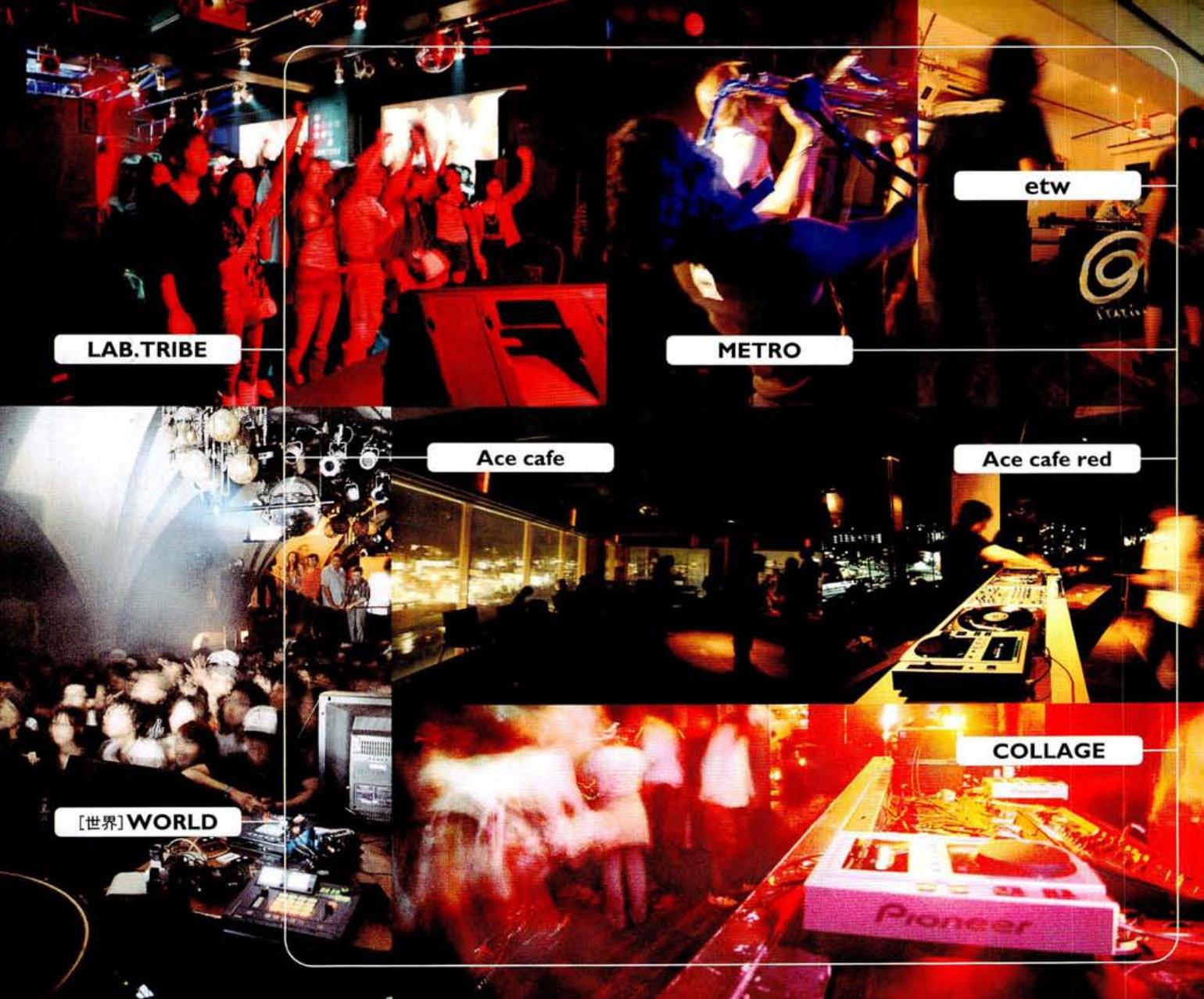
「今年と呼んでもらう立場なので、気楽です(笑)」。冗談とも本気ともつかないことを言ったのは田中知之だった。昨年、自身のデビュー10周年を祝う「FEM10」では、ホストとして彼の双肩にイベントの出来がかった。今年「kmf2006」のうち「F」に名前を貸した。肩にかかる重さが1/3になったのか、イベントが3倍の規模になったのか...

昨年の「RE:DI0」をリポートした本誌のテキストに、「伝説は一夜では成らない」という一節があった。「あの言葉で発憤した。そう語ったのは昨年・今年とイベントのオーガナイズを務めたSWILL Producersだ。予定調和を嫌い、常にサブプライズがあることが命題となり、今年もごく早いうちから計画が練られ、イベント当日に先がけて3カ月も前からαステーションでイベント専用プログラム「kmf RE:DI0」まで用意した。そして、昨年以上のイベントがやってきた。

「京都に新しい祭を」。そんな言葉がいくつも起こり、そして静かに消えていった。だが街から起こった催事は、雑草のように強い。しばらくの時を経て思う。「KYOTO JAZZ MASSIVE・沖野修也&沖野好洋」「MONDO GROSSO・大沢伸一」「FANTASTIC PLASTIC MACHINE・田中知之」という、京都の街の底から生まれ、そして日本のミュージックシーンを代表する大樹となった面々に冠したイベントは、祭であった。ビジネスだけでなく、感情論だけでもない。バランスの取れた京都の新しい催事になったことは間違いない。昨年同様、「Revenge」で行われたウェルカム・パーティー兼壮行会では、並み居る出演者たちがもはや手慣れた様子で各々の準備に向かった。オーディエンスたちも、要領が解らず右往左往した感はなく、スムーズに会場を行き来した。

恐らく来年もまた、このイベントは企画されるだろう。「2007」につなげるための「2006」だ。その時には、忌み嫌う「予定調和」という壁が待っているかもしれない。「ああ、去年のアレね」という言葉を覆すためには、常に成功を続けなければいけない。規模の拡大は、成功とイコールではないし、クラブ一カ所ですべて終わるものであってはいけないだろうが、年を重ねてベストなサイズになっていけばいい。言葉を変えて「定例」と捉えればいい。誰もが心待ちにする予定調和でありさえすればいいのだ。そして当日、待ちに待ったイベントの蓋を開けたとき、驚きに満ちたものがあるはずだ。

「街の底」から、ついに祭は生まれた。そして我々は祈ればいい。このイベントが歴史に刻まれ、何十年後に「伝説」として語り継がれるように。常に京都の秋が心躍るものになる。そのための充分なポテンシャルを持っているイベントなのだから。



LAB. TRIBE

METRO

etw

Ace cafe

Ace cafe red

[世界] WORLD

COLLAGE



会場が増え、巡回ルートも再考されたMKタクシーのシャトル。未成年用バスやアルコール対策といった、その他のシステムも昨年の成功を踏襲、高評価を得た。もちろんノークレーム、ノートラブルという驚愕の仕上がりで集客は2700人！



「去年もサバイバルだったからなあ。今年も生き残るぞお(笑)。元気ですから大丈夫。(ヴィジュアル担当なので)ミカ新くるくる周ります」と、リアルな決意表明してくれたミルクマン斎藤。キャリアも輝も京都と深い関係なので余裕あり



昨年も【世界】WORLDのVを担当していたSTEREO TENNIS。昨年のウェルカムパーティでも何かを食べている時にキヤッチしたような気がするが、要は動じない、落ち着き上手サンということ。朝らかさかイベントに花を添える



ウェルカムパーティが始まったとき、既に新風館でのキックオフイベントで一仕事終えてきた佐藤タジは、ひとり打ち上げのスタンス。「顔赤いけどイイ？(笑)」とグラスを片手にリラックスしていたのは、昨年からの連続出演だからか



「今年も呼んでいただけて光栄です！だって快挙だもん。無条件でOKですよ。今年も街でクラブ活動〜」と、昨年に引き続き「喜んで！」参加のSILVA。METROのBLACK JAXXのライブにもシークレットで登場。やっぱりこの姉さん最高！



ポスターのキービジュアルも昨年同様groovisionsによるもの。会場が増えたほか、サテライトショップも木更町を抱き込むことで100軒近くになり、より「街を挙げての祭感」が増した



昨年以上のゲストを集め、準備に奔走した【METRO/林薫】【世界】WORLD/中本尊一】【LAB. TRIBE/金正邦宏】プロデューサー陣が開会の辞。今回の功労賞。来年以降の伝説の積み上げも彼ら、縁の下を支える存在に依る



「今日はAce cafeでラウンジやって、朝は【世界】WORLDでアホを相手にアホなDJやってます。たぶん(笑)」とご機嫌だったサウキヨシヒロ。「祇園さん(八坂神社)に祈ってきました。だから今日のイベントは大成功間違いなし！」とも



「3人もリスナーの頃からリスペクトしてる人なので光栄です。進んでる、というラフな言い方だけど、京都っていう大好きな街のクラブカルチャーは大好き」と、心からのコメントを寄せてくれたm-floの☆Taku Takahashi



ウエノコウジ (RADIO CAROLINE) は「唯一のロックのDJなんで、ロックはダンスミュージックだと思ってるので、それを伝えたい」とコメント。リハーサルに向かう直前をキャッチしたにもかかわらず、実に紳士的なリアクションに感謝